生物多様性ちばニュースレター

CHIBA

生命（いのち）のにぎわいとつながり

No.45

平成27年10月

秋本番となりました。スポーツの秋、食欲の秋、読書の秋などと言われますが、野外での活動にも最適な季節です。生物多様性の秋として、水辺での野鳥観察など身近な生き物探しに出かけてみませんか。

本号では、県民参加型生物モニタリング事業の生命（いのち）のにぎわい調査団による生き物報告の分析結果を報告するとともに、生物多様性に関する市町村職員研修会及びビオトープ実地講座の開催報告と県立中央博物館で開催されている秋の展示「水草 ふしぎがいっぱい 水辺のいろどり」から水草の果たす役割について紹介します。

生命（いのち）のにぎわい調査団
～7年間の生き物報告からわかること～

平成26年11月24日 泉自然公園にて
生命のにぎわい調査団現地研修会

7年間の生き物報告全地点

生命（いのち）のにぎわい調査団は、千葉県の生き物情報の収集と共有を目的として平成20年7月に発足し、団員数は1,080名となっています（平成27年9月末現在）。上の図は、団員からこの7年間に寄せられた54,883件（8月末現在）の生き物報告です。これらの報告から、生き物の分布に関する様々な情報を読み取ることができます。今回はその一部をご紹介します。

CONTENTS

1　生命（いのち）のにぎわい調査団～7年間の生き物報告からわかること～ …… 1
2　生物多様性に関する市町村職員研修会を開催しました …… 3
3　ビオトープ実地講座を開催しました …… 3
4　千葉県立中央博物館秋の展示「水草 ふしぎがいっぱい　水辺のいろどり」から …… 4
5　千葉県の外来種チャネルキャットフィッシュ（アメリカナマズ） …… 4

【生き物報告対象種・報告件数トップ10】

第 1位　モズ (2,362件)
第 2位　オオバン (2,287件)
第 3位　キジ (1,569件)
第 4位　アオサギ (1,358件)
第 5位　カワセミ (1,304件)
第 6位　ツバメ (975件)
第 7位　ウグイス (411件)
第 8位　ミノムシ (314件)
第 9位　ニホンアカガエル (306件)
第10位　オオキンケイギク (282件)
(対象種報告 全14,229件)

調査団では長期的なモニタリングを実施していくため、生き物報告の対象種として、57の動植物を決めています。この57種については、生育・生息状況の長期的な変化をモニタリングし、報告件数を毎年確実に増やしたいと考えています。

活動を開始して7年が経過すると、報告が集まりやすい生き物とそうでない生き物がわかってきました。海の生き物は報告が少なく、植物より動物が多い特徴があり、特に鳥類の報告が最も多くなっています。報告件数トップ10のうち3種の報告地点を示します。

<ツバメ (第6位) 写真撮影：a0261>

人家に巣を作る身近な鳥ですので、市街地を含む県内各地から多くの報告があります。県内の分布を知るとともに、温暖化による気候変動がツバメの生活に与える影響を調べるため、季節報告として初飛来と営巣の情報も集めています。この7年間ではまだ大きな変化は見られませんが、10年後、20年後に貴重なデータとなるかもしれません。

<ニホンアカガエル (第9位) 写真撮影：a0285>

体長4～6cmほどで、目の横の線がまっすぐ後ろへ伸びているのが特徴です。ふだんは雑木林の林床等で暮らしますが、春先には水田や小さな水場で産卵します。「ニホンアカガエルの生息地」＝「近くに水場がある雑木林」の分布図ともなっています。

<オオキンケイギク (第10位) 写真撮影：a0724>

北米原産でかつては園芸植物として栽培されていましたが、平成17年度に特定外来生物に指定されました。道路沿いに県全域に広がっていると思われますが、県東部と外房地域からはほとんど報告がありません。

【対象種の報告種数個人ランキング】

「生き物報告」の件数は予想以上の勢いで毎年増えていますが、最近は報告対象種以外の割合が高く、残念ながら対象種57種の報告が減少傾向にあります。対象種以外の生き物については、報告の際に写真を必ず付け、調査団事務局で種名確認できるようにしていますので、千葉県の生き物情報としてはたいへん貴重ですが、前述の理由から対象種の情報も継続的に集めていくこととしています。

そこで、調査団では、今年から毎年1月から12月までの1年間の「個人ランキングトップ10」(生き物報告対象種57種のうち誰が何種類を報告したか) をにぎわい調査フォーラム (今年度は平成28年3月12日(土) に開催予定) で発表します。

参考までに、過去7年間のトップ10はこちらの皆さんです。千葉県の県民参加型生物モニタリング事業として、今後はさらに質の高い情報収集をめざしますので、ご期待ください。

第 1位　a0285・a0512 (44種)
第 3位　a0648 (43種)
第 4位　a0483 (41種)

第 5位　a0363 (38種)
第 6位　a0111・a0544 (37種)
第 8位　a0486 (36種)
第 9位　a0724 (31種)
第10位　a0458・a0708 (30種)

a＊＊＊は、生命のにぎわい調査団の団員番号です。

（御巫　由紀　千葉県生物多様性センター）

生物多様性に関する市町村研修会を開催しました

生物多様性に関する市町村職員研修会を7月8日（水）に県立中央博物館で開催し、46名の職員の皆さんに参加していただきました。

生物多様性の保全等のためには、まちづくりの主体である市町村による取組が不可欠であることから、毎年研修会を開催しています。

午前中は、特定外来生物「カミツキガメ」について、県生物多様性センター職員が、県による防除活動とその課題、捕獲の際の留意点、他のカメとの見分け方について、実際のカメを用いて説明しました。

午後は、同センター職員が、生物多様性の保全と市町村の関わり、外来生物問題全般の2点について説明を行いました。また、市町村における取組として、船橋市と印西市の職員の方から具体的な事例を交えてお話いただきました。テーマは、船橋市が、策定中の生物多様性に関する市戦略の策定に至った背景、進捗状況、今後の展望等について、印西市が「オオキンケイギク」などの外来生物対策、自然環境調査、里山調査等についてで、質問も多く、参加者の関心の高さがうかがえました。

（峰間　絢子　千葉県自然保護課）

研修風景（カミツキガメの取扱い）

ビオトープ実地講座を開催しました

8月25日（火）に市川市立市川自然博物館と自然観察園でビオトープ実地講座を開催しました。ビオトープの造成や維持管理に関わる地方自治体、学校、NPO、企業などの職員17名が参加し、日本生態系協会の田邊龍太氏によるビオトープに関する講義と、市川自然博物館の金子謙一氏による自然博物館と自然観察園の観察を行いました。

田邊氏の講義では、ビオトープという概念の成り立ちや、ビオトープとして造成される環境の多様さ、ビオトープを造る上での指針などを解説し、特に、「ただの草原でも、そこに生物が住みつけばビオトープになる」、「そこに暮らすようになってほしい生物を最初に決めることが大切」など、ビオトープに対する理解を深めることができる話題が多数上りました。

次に、金子氏による自然博物館と自然観察園の解説では、自然観察園として残された谷津の観察を通して、ビオトープで目指そうとしている地域本来の自然の姿が紹介され、自然観察園に生息する生物の生体展示の解説が行われました。

自然観察園では谷津に生息する多様な生物を観察しながら、湿地の維持管理の難しさ、周囲の住宅地や道路から流入するゴミや汚水への対策、外来生物が生息したり放流されたりしている現状などの説明がありました。

自然博物館では、自然観察園内に生息していても観察が難しい生物を飼育・展示しており、観察園を自然環境保存の場として、博物館を環境学習の場として分けることで、保全と活用を両立しています。

午後のみの短い講座でしたが、ご参加いただいた皆様には有意義な時間を過ごしていただけたのではないでしょうか。来年度も夏休み期間中に開催する予定ですので、興味を持たれた方は是非次回の講座にご参加ください。

（栗田　隆気　千葉県生物多様性センター）

自然観察園で説明を受ける参加者

千葉県立中央博物館 秋の展示
「水草 ふしぎがいっぱい　水辺のいろどり」から
展示期間：10月31日㈯～平成28年2月14日㈰

「水草が水を浄化する」そう聞くと、窒素・リンを吸収してくれるから‥と思い浮かべる方が多いと思います。しかし、植物体内に蓄積した栄養分は、刈り取らない限り枯れると再び水に戻ってしまいます。水草が水をきれいにする役割は意外にも生きものたちへの場の提供を通じてという側面が大きいのです。

水草は水生生物の隠れ家となります。ミジンコに代表される小さなプランクトンたちは常に魚やオタマジャクシ等に捕食される危険を背負っています。こうした小さな生きものにとって水草が繁茂する場所は、身を隠し捕食者から逃れる絶好の場です。

植物プランクトンが水に溶けている窒素・リンを吸収して増殖します。その植物プランクトンをミジンコたちが食べます。このミジンコたちを小魚やヤゴ、オタマジャクシなどが捕食し、さらにそれを大型動物が食べて水辺から離れます‥。こうして、水中の窒素・リンは動物の羽化・陸生化を通じて水から出て行きます。水草の周りは浄化の舞台です。

このように大切な役割を果たす水草が、近年、身近な川や湖沼から人知れず姿を消しています。家の近所にはたくさんあるけど‥という声も聞こえてきます。しかし、たくさんあるように見えていても、特定の種だけが繁茂していて、かつての様々な水草たちの姿はそこにありません。

水草の多様性の衰退。これは水草が担ってきた水環境保全の役割が損なわれたことも意味します。多くの川や湖沼の汚濁が急速に進んだ背景には、水草という陰の立役者が降板させられた寂しい現実も隠されています。今回の展示では、水草の役割や変遷も紹介する予定です。この冬は中央博物館へお出かけください。

（林　紀男　千葉県立中央博

千 葉 県 の 外 来 種
チャネルキャットフィッシュ（アメリカナマズ）

「アメリカナマズ」の別名のとおり、北アメリカ原産のナマズの一種で、養殖を目的として1971（昭和46）年以降に埼玉県等に導入されました。

本種は最大で全長約1.3mと日本のナマズ類よりもはるかに大型になり、魚類を中心とした在来生物に及ぼす影響が大きいことから、外来生物法における「特定外来生物」に指定されています。

国内には本種の大規模生息地が4箇所あり、その一つである茨城県の霞ヶ浦ではすでにその広域で本種の定着が確認されています。霞ヶ浦では、テナガエビやハゼ類等に対する捕食被害だけでなく、胸ビレの鋭い棘による魚網等への被害も発生しています。残念ながら、本種は利根川を経由してすでに手賀沼や印旛沼でも普通に見られるまでに増加しています。

なぜ、チャネルキャットフィッシュはここまで増加してしまったのでしょうか。その理由として、同じく北アメリカから導入され、特定外来生物に指定されているブラックバス類（オオクチバス、コクチバス等）やブルーギルと同様に、国内にこれらの肉食性魚類の強力な天敵（捕食者）が存在しないことが挙げられます。そのため、これらの外来種を減らすためには、私たち人間が「捕食者」としての役回りを果たすほかないのです。

釣り上げた際に非常に引きの強い本種は、「大物釣り」の釣り人にとって、格好の対象になります。また、その場で「活け締め」をすれば、食用として持ち帰り、活用することができます。本来食用であった本種の肉は、その見た目とは裏腹に、肉厚でありながら淡白で非常に美味です。

生命を奪うことは残酷ですが、その生命をいただくことで守られる命もあります。次の休日には、ぜひ、チャネルキャットフィッシュを釣りに行ってみませんか。その際には、くれぐれも胸びれの棘にはご注意を。また、「特定外来生物」の本種は、生きたままの移動、保管はできません。

本稿の執筆にあたり、茨城県農林水産部漁政課の荒山和則博士にはチャネルキャットフィッシュに関する情報をご教示いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

（鈴木　規慈　千葉県生物多様性センター）

水草の繁茂する水辺は水浄化の舞台
生物多様性ちばニュースレター　№45　　平成27年10月31日発行
編集・発行　千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）
〒260 - 8682 千葉市中央区青葉町955 - 2　（千葉県立中央博物館内）
TEL 043(265)3601　FAX 043(265)3615　URL http：//www.bdcchiba.jp